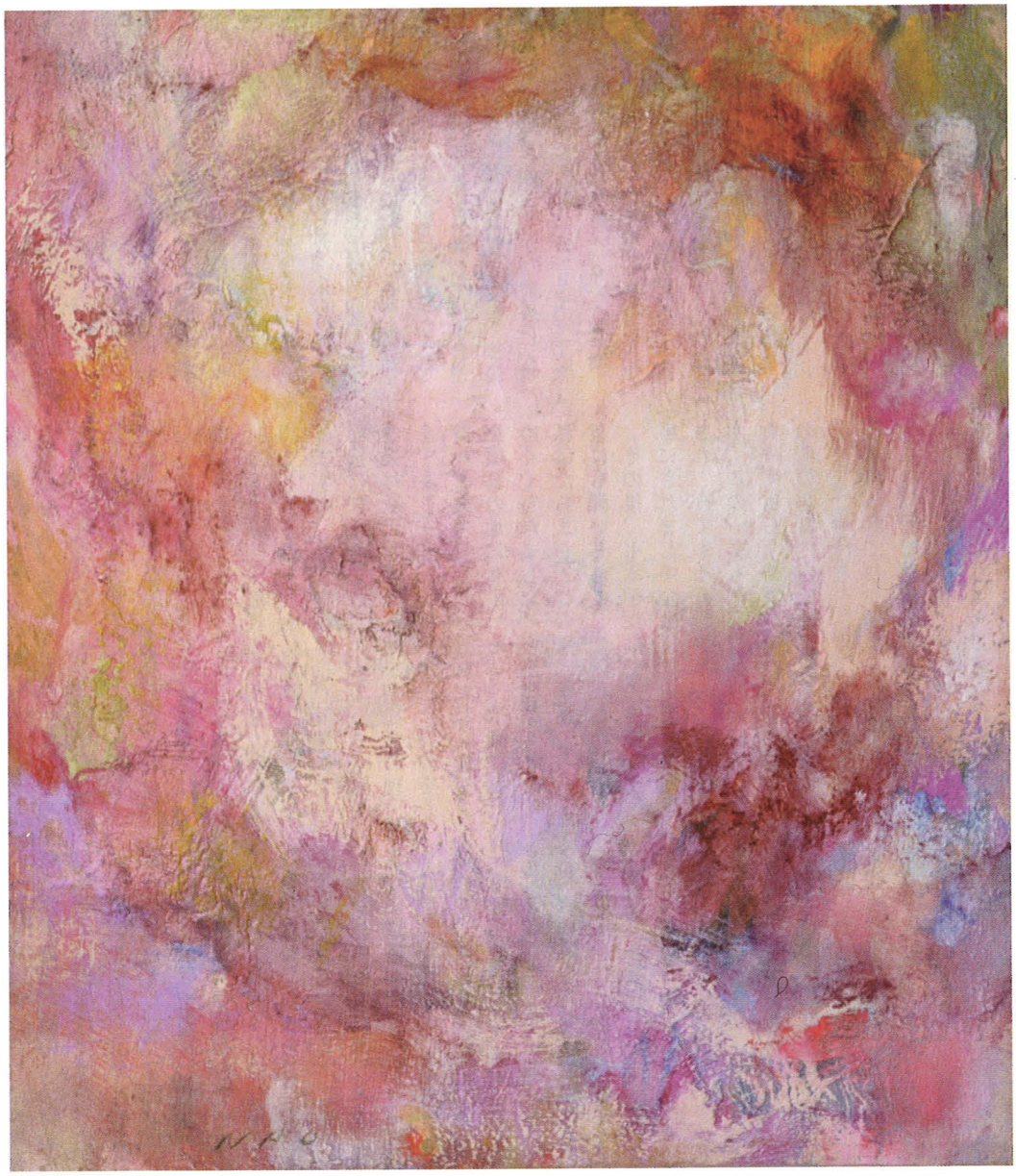
子供から大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を　1998年9月1日発行　［隔月発行］

文化高知

'98年9月　NO.85



「Morph」浪越篤彦

(財) 高知市文化振興事業団

酒なくして酔へ

瀬戸勝男

土佐の地には、地縁および血縁の全くなかった私が、土佐の地に辿り着いたいきさつから述べたいと思います。旧制中学時代に旧制弘前高校を経て東大文学部を出られた小針先生という方に東洋史を教わりました。中学時代はもちろんのこと、その後もよくご自宅まで参上し、一献酌み交わしながら、種々ご教示を受け続け、結婚披露宴にて祝辞までいただいております。

小針先生は、母校の弘前高校のことより旧友が卒業された旧制高知高校のことをよく話されました。旧友を介して小針先生からいただきました資料によりますと、高知高校の江部初代校長は、第一回の入学式にて「感激あれ若人。感激なき生活は空虚の生活なり。此感激の中でも全人格を動かすに足るものは人格完成への努力である。校風は單に教室のみから生まれるものではない。廊下からでも校庭の隅からでも興きるものである」に始まる非常に格調の高い、心を打つ告辞をされたようです。

小針先生によりますと、旧友はじめ入学生はもちろんのこと、教職員も、この告辞には完全に酔わされまして「感激なき人生は空虚なり」という言葉が高知高校のモットーになっているとのことでした。小針先生は旧友から高知高校や土佐の魅力について聞かされていたらしく、高知高校を受験するよう私に勧めてくれました。小針先生に私淑していました私は、最初は弘前高校を受験しようと思っていたのですが、何分にも多感な年ごろでしたので、この「感激なき人生は空虚なり」という言葉に完全に酔いしれて、高知高校を受験する気になってしまいました。しかし、結局は実現できず、地元の旧制二高の受験に失敗した後、旧制専門学校を経て、自宅から通える学校で学生生活を終えました。

土佐への想いをほぼあきらめておりましたころ、無医県解消の政府の方針により各地に医学部が出来ることになり、教授の公募が行われ始めました。そのころ、私は横浜市大の助教授をしていましたので、上司の川上教授に高知からの公募のあり次第それに応じたいと申し上げましたが、東京や郷里の周辺の大学からのお誘いがあったこともありまして、「そんな遠くに行くよりは近い所に行った方がよい」というご意見でしたし、聞いてはおりませんが、おそらく家族もそのように考えたのではないかと今でも思っております。

なんとか川上教授のご同意だけは得まして、高知医大に応募書類を送りますと、平木初代学長が横浜まで面接に来られました。そのとき平木学長は敬天愛人から始まる建学の理念、そして大学運営の基本方針を諄々（じゅんじゅん）として説かれ、最後には「土佐を墳墓の地にせよ」という言葉でしめくくられました。根が感激音痴の私はたちまち、この平木学長のお言葉にも酔いしれてしまいました。

その後、平木学長はこの内容を文書にされまして全教授予定者に配布され、今でもそれを保存しております。この一文も江部校長のお言葉に負けず劣らず格調の高い、実に先見の明のある内容でありました。よく、「青年は酒なくして酔へ」ということが言われておりますが、人間というものは常に冷静すぎるのも考えものだと、私は思っております。酔心地が大好きな私は今でも「感激なき人生は空虚なり」という言葉に酔っております。

土佐リハビリテーションカレッジは平成五年に創設された理学療法学科と作業療法学科の二学科からなる四年制の専門学校ですが、この四月に生まれて初めて入学式の告辞なるものを行いました。素面（しらふ）で「日本一の、いや世界一のリハビリテーションの教育機関を目指して、学生・教職員一体となって努力しよう」などと夢みたいなことを言って列席者の顰蹙（ひんしゅく）をかっております。

しかしながら江部校長の入学式の告辞の最後の、「汝等の前に高く高く理想をかかげよ。坦々（たんたん）として我等を待つ。唯進めば足る」という言葉にも酔っております。私としては、まだまだ言葉不足にて、もっともっと格調の高い理想をかかげるべきであったと今は心から反省いたしております。最後に、高知高校の出身ではない私如きが、江部校長のことについて述べましたことは僭越至極と存じておりますし、また県内には高知高校の出身者が多数おられると思いますので、江部校長のお言葉等に間違いがありました節には、なにとぞご指摘ならびにご指導賜りますようお願い申し上げまして擱筆させていただきます。

（せとかつお・土佐リハビリテーションカレッジ校長・高知医科大学名誉教授）

旅のスケッチ

清遠光令

孫が母の守役として加わって（ロンドン塔をバックに）

この所、私の海外旅行の楽しみにスケッチが加わった。その前に旅を始めた動機と言うと、今年八十三歳の妻の母がキーワードとなる。

五年前に一人身になった母は、世界を旅したいとの思いを募らせていた。母の夢は、四人の息子、娘が、それぞれの相手を巻きこみ実現した。ツアーの愛称は「ファミリーグループ」。旅行業者が名付けてくれた。

初めての訪問先に、英・仏それにスイスを選んだ。最初のロンドンで早速珍事が待ち受けていた。ロンドンの七月は、ウインブルドンテニスの季節である。宿舎のやりくりのお陰で、バッキンガム宮殿近くの高級ホテルに格安で泊まれた。しかも私達夫婦は豪華な室に恵まれた。ここまでは大いについていた。早速部屋に入り、十五時間もの長旅の疲れを一刻も早く風呂でいやしたいと、元栓をひねった。ただ広い隣室で荷ほどきをする僅かの間でなかっただろうか。湯舟に溢れたお湯は、洗い場の床を乗り越え、ひたひたとカーペットを滲ませ我々に迫って来た。階下には漏れないよう、早く手を打たねばと慌てて探すが頼みの湯桶がない。有るのは空のチリ箱。これが使える。それにバスタオルとある限りのトイレットペーパーも急場しのぎに役立った。異国の夜を楽しむはずの豪華な部屋は、妻と二人で、お湯と格闘する場と化し、一息つけた時は、夜明けが近かった。

その後もカナダ、アメリカ、イタリア、ギリシャへと、意欲的に行動する母に追随した。その都度、珍事はあったが、一方で全く久しぶりにスケッチをする余裕も生まれた。

道中でのスケッチは走り書きばかり、中でも移動中のバスの中では手際よく描かないと、車窓に流れる景色は次々と消えてしまう。その内に要領を覚えた。景勝地の要所要所でガイドさんが足を止める間が、まさに〝スケッチ・チャンス〟だった。この時は、ガイドさんの説明に耳を傾け、眼と手は、ひたすらスケッチに精出した。放送記者の頃、カメラを回し被写体のおしゃべりを後で記事にした経験が生きた。

今、二女がニュージーランドにいる。クライストチャーチ市に住む娘をこの五月、単身訪ねた。その地から気ままな旅をした。旅の全てをキャッチしようと腰に巻いたベルトの左右には、ハンディビデオと双眼鏡を構え、首からは、スケッチブックとカメラを吊した。周囲は外国人ばかり（もっとも我々が外国人なのだが）。旅の恥はかき捨てではないが、バスの中ではビデオ撮影やスケッチ等にせわしく動いた。その様は、働き蜂「日本人」の姿と映ったことだろう。「あの日本人はすごい。感心（？）したと話しているよ」と、娘は親の耳許で冷やかした。

旅先でのスケッチは、何枚たまったことだろうか。湯舟騒ぎのような身のすくむ珍事は流石に減ったが、その代わりに行く先々で描いたスケッチが、私にはどんどん増えている。母には、この夏も娘らとの旅が待っている。母の夢がまた一つ叶うことになる。

（きよとうみつはる・RKC高知放送総務局次長）

ウィーンで国際親善

～歌声は国境を越えて～

橋本憲佳

名門合唱団と夢の共演

千八百名の聴衆で満員のウィーン・コンツェルトハウスの大ホール、合唱団員七十名によるフィナーレの合唱『美しく碧きドナウ』が終わるや、万雷の拍手が館内いっぱいに広がる。いつまでも続くカーテンコールに、指揮者がステージに呼び戻されて幾度も丁寧に挨拶をしている。

平成十年四月三日（金）午後九時、ジャパンフェスティバル最終回のステージ。友情出演のウィーンの男声合唱団員三十名の面々も皆満足そうにこれに応えている――。

日本とオーストリア両国の人々が合唱音楽を通して演奏者と聴衆の心が一つに溶け合った瞬間の感激です。

これは、『一九九八年ウィーンコンツェルトハウス・チャリティー・フェスティバル』という催しで、広く日本の芸術文化をウィーン市民に紹介する芸術祭です。

出演は、高知フラワーソングクラブの有志四十名とウィーンの男声合唱団員三十名とによる合同演奏で、ステージいっぱい、総勢七十名が、ドイツ・オーストリア・日本と、三つの国を代表する名曲を演奏したのです。

芸術の都ウィーンの由緒ある豪華なウィーン・コンツェルトハウスで、しかもウィーンの名門合唱団との合同演奏！、私どもにとって、まるで夢のような公演がどのようにして実現したのか、その経緯をご報告いたします。

まず最初に、私どもフラワーソングクラブの生い立ちから……。それは、日本が先の第二次世界大戦に破れ、完膚なきまでに徹底的に打ちのめされた人々の心の荒廃を、わずかでも慰められるなら、との思いから、終戦の年、昭和二十年に、旧高知県立高知第一高等女学校の卒業生を中心にして作られた合唱団です。従って、その活動はもっぱら『荒廃した人々の心に燈火を、生活に潤いを』を目的として、今日まで歌い続けてきているのです。早いもので、今年で、はや五十三年の月日が経ってしまいました。

『合唱音楽をもって社会に奉仕する団体』ですので、いろいろな公的な行事の際には、要請があれば、事情の許す限りこれを引き受け、全員無料で奉仕をさせてきていただいております。

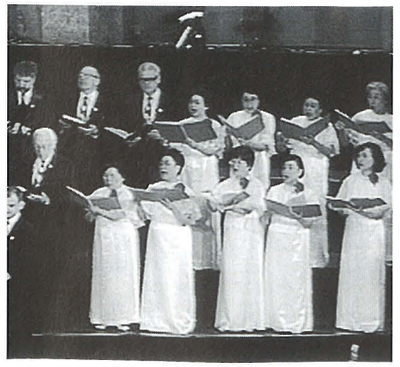
このような活動が認められて、日本国内の主要都市はもちろんのこと、海外演奏も、これまでにニューヨークのカーネギーホールをはじめ、アメリカで四回、オーストラリアはシドニーのオペラハウスで、その他、ドイツ、中国、チェコスロバキア等と、既に十回近く公演を行ってまいりました。

そして、今回のような、私どもにとっては、まるで夢のようなウィーンでの演奏が実現したのです。

ところが、この時期が、あいにく四月初めとあって、男性達が殆ど参加できず、半ば諦めかけておりましたところ、この事情を知った主催者側が、かなりの交渉をして、現地の男声合唱団に友情出演をしてもらえるように取り計らって下さったのです。おかげで、ここに、私どもの夢が正夢となって現れてきたのです。

音楽で広がる心の輪

この合唱団の名称は『アツゲルスドルファ男声合唱団』。一八八〇年にウィーンに誕生した男性ばかり三十名からなる古い歴史と伝統を誇る名門合唱団です。通常ならば、望んでも叶えられないウィーンの合唱団と合同で、『菩提樹』『荒城の月』『美しく碧きドナウ』の三曲をそれぞれの原語で演奏するのです。そこには、お互いに言語という厚い壁が横たわっていましたが、その障壁を克服して練習をした結果、見事に『音楽による国際親善』が達成されたのです。



無事演奏を終えてアツゲルスドルファ男声合唱団と一緒に（ウィーン・コンツェルトハウス正面玄関ロビーで）

同じ曲目を一緒に、そして、指揮者のタクトの下、一糸乱れず演奏しなければならないというハードな特訓。期せずして、二つの合唱団員の間に緊密な連帯感が生じ、単なる言葉では表現し得ない、深い感動さえ覚え、強い友情の絆に結ばれ、再会を約束し、ウィーン市民の温かい拍手に包まれながらステージを後にしたことでした。

誠に、音楽というものは、人間の心から心へ、その心情をダイレクトに伝えることのできる、何と素晴らしい芸術ではありませんか。終わりに、この合唱団の指揮者から送られてきた感想文がありますので、その要旨のみご紹介いたしましょう。

＊　＊

親愛なるフラワーソングクラブの皆様へ。私は〝アツゲルスドルファ男声合唱団〟の女性指揮者として遥か東方の素晴らしい合唱団と共演させていただきましたことをことのほかうれしく存じております。音楽の力は、両国の人々の心を結びつけ、共演の際のあらゆる困難を取り除いてくれます。このたびのウィーン・コンツェルトハウスでの出演は、私達一同にとって、大変貴重な体験となりました。

私達は、プログラムにありました『荒城の月』という日本の歌曲を良く理解することができましたし、また、今回のコンサートを通じて、オーストリアの聴衆も、あなたの国の素晴らしい伝統ある音楽文化の一端に触れることができたものと思っております。

今後とも、私達はコンサートでのご成功を期待いたしますとともに、次のコンサートに向けて、楽しく練習されますことをお祈り申し上げます。そして、恐らくもう一度、私達は共演できるのではないかと思っております。

アツゲルスドルファ男声合唱団1880　女性指揮者　ジークリンデ　ミハルコ

（はしもとのりよし・高知フラワーソングクラブ主宰）

創作演劇「信親」顚末記（下）

わが心に深く……

吉本智賀子

今、『信親』顚末記を書くにあたって、様々な思いが去来し、その度に私は動揺する。一つのことをいうのに百の言葉を持ってきても語り尽くせない気がし、一語に凝縮しようとしてもしきれない、とてもはがゆい自分がいる。思い入れが深すぎるのか、まだ私自身の中では『信親』が終わっていないのか……。そう、確かに思い入れはきっと誰にも負けず深いものがあるにちがいない。

時に思いの渦に圧倒され、それを表現することもできずに、尻尾を巻いて逃げそうになる自分を叱咤しながら、時を溯って思い返してみよう。

確かあれは、一九九七年（つまり去年）二月（頃…？。多分…）突然の電話。

ルルルルルル……ガシャ！

「吉本でーす！」

「森田ですう」

「……（高知市文化推進協議会の森田さん！懐かしい声に、少し戸惑う……）。ご、ご無沙汰してます」。この時の電話の音は、今回の信親狂騒曲へ誘う〝1ベル〟であった。

「もとは武市さんが引受けちょったき、武市さんがこうなったからは、あんたが演出を手伝わなぁいかん！」と森田さん。（それってへ理屈……）と思いながら、武市さんが元気な頃を思い出す。

「二年後の文化祭の五十周年記念公演『長宗我部』引受けたぞぉ」と言う武市さんの声が私の頭の中で響く。当然武市さんが動けば、私も劇団員全員動く。「お前は制作の方もやらんといかんぞ。腹をくくっちょけ」……腹をくくっちょけ……。逃げようのない長宗我部。そう思った。そして、四月も半ば過ぎ（いわゆる本番のほぼ一年前）、「今日の夕方、善後策を話し合おう」という、森田さんからの電話。これが〝本ベル〟。

そうして、幕は切って落とされる。……これで思い出した。プロローグの後に、『振り落とし』を使おうか迷った時期があった（一人前にちょっと知っちゅうテクニックがあった！）が止めた。幕が切って落とされる＝振り落とし。あまりに安直。「ククク……、お前の発想はそんなもんよ……」。空の上の武市さんの皮肉な笑いが聞こえる。ムム……。決めた！愚鈍と言われてもかまん。奇をてろうたようなことはすまい。

さて問題の長宗我部。考えてみれば、長宗我部について私はまったく無知である。参考文献を読んだり、人から話を聞いたりしていく中で、心が引かれたのは、元親の周りの人達、それも農民や庄屋のように平素は土と共に生きながら、いざ戦さとなると槍や太刀を持って集まってくる命知らずの無骨な男達、一領具足と呼ばれる人達だった。（奇しくも森田さんと意見が一致する）

混沌とした戦国、下剋上の時代、高知特有のギラギラした太陽や土や汗が入り交じった強烈な匂いの中での、生き生きとした人々の営み。どんなやったろう……？。乏しい知識と想像力の前でのたうつ私。

本番まで、約一年。いろいろ思い悩む時間ももどかしく、大慌てで、脚本の北野まりこさんに話をもっていく。（彼女は二年前、高知県主催の男女共立時代をテーマにしたミュージカル『虹に願いを』の脚本を手掛けている。私はその時、何十年振りかに彼女と再会したのだった）

「ちょ、ちょっと、時間がねえ……」と尻込みする彼女に、ここで会ったが百年目とばかりに攻める私。

演技指導する吉本さん（左から２人目）

創作演劇「信親」のフィナーレ。市民のパワーが集結した

もともと歴史の好きな北野さんに、八月の初めに原稿を上げると約束してもらった。

六月、北野さんと二人で、大分の戸次川古戦場跡に立つ。信親をはじめ七百人近い長宗我部家の家臣や一領具足たちが壮絶な最期を遂げた地である。大分大学講師で大分市教育委員会の秦政博氏や郷土史家の白川武男氏のご好意あふれる説明の中で、悲劇の将である信親のイメージが浮かんでくる。白川氏が、鶴賀城跡を指差しながら「信親はよっぽど鶴賀城へ行きたかったのでしょう……」。信親の思いが時を越えて私たちに訴えているようだった。北野さんもその場で「信親を主に持ってきたい」と言う。決まったなと思った。

八月、約束通り原稿が上がり、私は上演時間や演出効果を考えながら、舞台用の台本にアレンジしていく一方で、役者さん達と顔合わせや軽い読み合わせがやっと始まる。

その頃私はプロローグで悩んでいた。ちょうど黒藤院蝉丸さんの舞踏が美術館ホールであった。薄闇の中、琵琶の音色と語り……うごめく人々……。あ！これ……イメージが広がっていく……。高知には琵琶の奏者はいないと聞く。が無形文化財の竹本一長師匠がいる。太棹で語ればどうなるだろう。踊りは伊野由美子先生にお願いしたら……。詩は森鷗外作叙事詩『長宗我部信親』より戸次川合戦が始まる直前までをまとめた。そして本編の最大の山場、戸次川での戦さのシーンにプロローグの続きの語りを入れようと構想を練った。しかしこの戦いのシーンは、殺陣の林建紀さんも役者も私ものってきて、どんどん激しくなり、浄瑠璃の語りのスピードできかなくなり、とうとう削除してしまった。

キャスティング発表後、本格的に読みが始まる。そして立ち稽古へ。役者さん達の苦難が始まる。

私は当初から、いや最後まで、堅苦しい時代劇にはしたくなかった。土臭い、庶民的なものにしたかった。遠流の地といわれるくらい土佐は田舎なのだ。私は肩肘張るでもなく、卑下するのでもなく、土佐という土壌に根付き生きている人達の四百年前を舞台に描いてみたかった。土佐のジリジリする陽射しのきつさや、潮の香り。ムンムンする土の匂いや、体臭……。野性的な土佐……。野性味いっぱいの人々……。

自分のこだわりをいかに舞台化できるか……。演出としての自分との戦いだった。だから私にとって『信親』は、終わったのではなく、始まったばかりなのだ。

紙面の都合でそろそろ筆を置かなければいけない。まだまだ書きたいことがいっぱいある。それぞれの役者さんのこと。殺陣シーンの稽古の時の昔少年だった人達の本当に嬉しそうな楽しそうな表情（この頃からだ、皆の気持ちがまとまってきたのは。まとめてくれたのは、林さん）。戦さのシーンでの、殺るか殺られるかの悲惨さ、むごさを必死の形相で説明する林さん。舞台効果を高め、役者の気持ちをのせてくれた音楽。最後まで悩み、みんなを悩ませたエピローグ……。かつらをふっとばすくらいの役者の思いいれ……。etc……。

……わが心に深く……

（よしもとちかこ・劇団ゆまにて代表）

折紙と平和

川井淑子

手は心のお使い

私は紙の里・伊野町加田で生まれ育ち、紙漉きの環境の中で生活をした。破れて商品にならない和紙でふかした芋を包み、懐に入れて温かい芋を食べさせようとした曽祖母の心の温もりが、和紙を通して私の中に陽だまりとなっている。その懐かしさが紙に触れると安らぎ、優しさが静かに限りなく広がっていくのではないかと思う。

古くから折り継がれてきた折紙は、日本の誇る文化遺産であり、今では世界共通語ＯＲＩＧＡＭＩとなり、世界平和を軸に友交・儀礼・教育・遊び・リハビリ等に広がっている。

一枚の紙の中には無限の点、線、面、ふくらみがあり、それを愛することから始まる。心の中の感動を形として表現する創作創造の豊かさに満ちている。手は心のお使いとして、そこに生命を誕生させていくことは、生きる喜びにつながっていく。

地球は創作の泉

創作することは想うことから始まる。例えば、花の生命の美しさに感動し語りかける時、花は優しく微笑んでまぶしいほどの生命を輝かせてくれる。私が折るというよりは、目に見えない大きな慈愛が手を動かせてくれて、花が折らせてくれるように思う。

瞬く間に創作できる時もあれば、表現ができず暗く長いトンネルに入り込んで、苦しい日々もある。しかし、必ず光が迎えてくれる出口があることを信じ、その先の折って下さる人々の笑顔を希望の灯として、自分の生かされている生命を抱きしめて励むと、ある日、目の前が開けてくる。手と目と心が共応し、美しい世界が創作される、その喜びは計り知れない。

このように一つの世界が生まれると、次の扉が開かれて、思いもかけなかったものが見えてくる。この地球は美しいものに満ちている創作の泉である。この地球を皆の心で守り育てなければならないと思う。

世界に広がる折紙

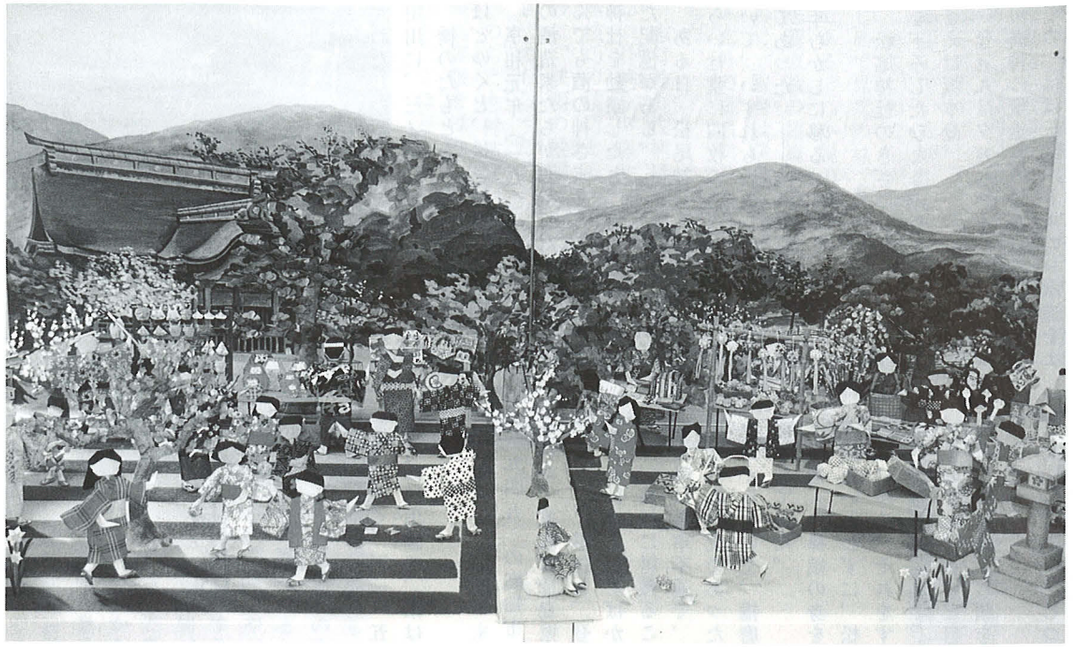
私が初めて国外に出たのは、二十年前のことである。それは世界の友交と親善を目的にメキシコの美術館で開催された世界折紙展出品と指導のためである。その頃は遠い国だと思い、決意をしながら主人や出品者と共に飛び立った。

私と娘との共同作品は畳一枚ぐらいの立体作品で、テントウムシやカマキリ等がヤシの木の下に集い、人間を虫にたとえてサンバやよさこいを踊っている、陽気に踊ろう、という作品であった。

会場の入り口に大きく展示され、日墨親善の両国旗を立てて下さった。なだれ込む長蛇の列は、拍手と笑顔と握手で始まり、明るい民族の感動の声は、やがて大きな渦となった。その感動がきっかけとなり、メキシコ折紙教育の道が開かれ、今その輪が広がっている。

折紙はもともと、三十八年間保育者として働いた中で息づいていたが、社会教育や各種大学、専門学校の講演や折紙教室等の分野にかかわってから三十年。友交親善や世界折紙展指導等で訪れた国は多い。

県民希望の翼で中国へ、洋上セミナーで韓国へ、ヨーロッパ各地、オ



童謡をテーマに開かれた「世界のおりがみ展」の会場は、さながら「おとぎの国」のような雰囲気に。写真上は「てまりうた」――ち密に折られた折紙の数々に訪れた人々もしきりに感心していた
（今年４月、市内のデパートで）

ーストラリア、アメリカ、シンガポール等と回を重ねた。

心で語り、心をみる

シンガポールは国全体がクリスマスに包まれていた時のことである。折紙指導の場面で目の不自由な方が習いに来られると聞いていたので、指導法の言葉を練習した。思いやりということは相手の立場に近づくことであると、目を閉じて何回も繰り返し研究した。

私は土佐和紙で法被、友禅和紙で小袖を折る計画であったが、希望されたのはサンタクロースであった。しかも貴女の創作をと。人の創作のサンタは折れるが、自分の創作はなかった。頭から水を被った思いがしたが、一晩時間を頂いて、心清めて紙に向かった。

祖母の口癖は「無理をしたらいかん。できるばあのことをまごころでやったらえい」。そうだ、私は今、世界の平和を目的としてここに来たのだ。この一枚の赤い紙は昔一枚の召集令状の赤紙ではない。平和のための赤い折紙だと思い、紙の里・伊野の大国様の顔を思い出しながら、白い顔にひげ、眉、目鼻、耳、赤い帽子の優しいサンタが生まれた。ありがとう『紙様』。

習いに来られた人々の中の目の見えない方達が指先の目と心の目とで折紙を折って下さった。私はその方達の方へ向いて、指導させてもらった。彼は終わった後、手を上げて、立って何やら話し始めた。

通訳の方が訳してくれた。「日本から来た貴女、貴女は心で語ってくれた。私は耳を傾けて聞くことができた。目の見えぬ私は貴女の姿は見えないけれど、貴女の心をみることができた。ありがとうございました」。大粒の涙が頬に光っていた。

あちこちと観光はできなかったが、観光とはその国の光を観ることだと思う。それは人の心の輝きだと。胸いっぱいのシンガポールの国花、蘭の花束が今なお心の中に咲いている。

思う外国は遠かったが、行動すると近くなり、人の心と出合う時より近い国となる。世界の人々と心開いて語り合い、まなざしが共有できた時、地球は一つになれると思う。

（かわいよしこ・日本折紙協会理事）

おもかげ三人

志村 喬のことなど

堀内 豊

わたしの家からさほど遠くない神田川に、三ノ瀬橋が架かっている。

橋のたもとから南へ七〇メートルほどゆくと、松尾神社がある。

享和元年（一八〇一）、高知城下の酒造家たちが造営したそうで、なんでも酒の神さまで有名な京都松尾神社を勧請したと、何かの本で読んだ記憶がある。

ある日。松尾神社へゆくと、仄ぐらい社堂に四枚の絵馬が掲げられていて、いずれも酒造りの情景を描いてあった。――これから話しは五十年むかしに移る。

松尾神社のきざはしにどっかと腰を下ろしたひとりの老人がいた。なまえは坂本登。

登老人は夕方ちかくになると、神田高神の俄造りの家から松尾神社までの、ほぼ千メートルの一本道をよたよた歩く。幅一・五メートルの道の両側は田圃で、家は三、四戸しかない。

ところで、坂本一家は昭和二十年（一九四五）の高知市空襲で焼け出された。家族は徳島県箸蔵（池田町に編入）に移住し、登老人は内妻と、四国銀行に入ったばかりの孫娘と三人で、高知に居残ることになった。

当時は電車不通で、バス運行もままならぬ状況であったから、孫娘は神田から歩いて、播磨屋町の銀行を往復していた。

登老人は孫娘の身を案じて、五風十雨もいとわずに、松尾神社まで出迎えにゆく。それをすこしも苦にしない。帰るのを待ちわびる老人は、神社のまえで孫娘と目を合わしたとたん、安堵感から顔をくしゃくしゃにさせた……。

なにを隠そう。じつはこのときの孫娘は、わたしの人生の伴侶になったから、縁は異なもの味なもの、である。

さて昭和二十九年（一九五四）。わたしは若松町で仮寓していた。ひさしぶりに家内と映画館にゆく。黒沢明監督の『七人の侍』を上映していた。志村喬が七人の侍の頭領、島田勘兵衛に扮して、ラスト・シーンあたりで、

「侍は、大地の上を吹き捲って通り過ぎるだけだ」

と、つぶやいた台詞が、いまでも心に残っている。つきつめて言うと、このことばにこめられた無常観（人世の寂寥感といってもよい）は、志村喬でなければ表現できないほどの重みをもっていた。

帰宅すると、間もなくして家内が言った。

「きょうは良かった。登じいさんを憶いだせて……。おじいさんの顔立ちとしぐさ。それにものの言い方は、志村喬とそっくりだった。まるで生き写しみたいに……」

登老人のことを聞かされたのは、その日が最初で、以後、折にふれて、

「登じいさんは、京都で習った墨絵を描いて、いつもタンスの引き出しに蔵っていた」

とか、

「おじいさんは浄瑠璃が好きで、細工町（いまの帯屋町一丁目）のお師匠さんところへ通ってた……」

などと、温和でもの静かな、やさしい祖父の人柄を語ってくれたものである。

というところで、こんどは志村喬について述べてみよう。

さるひとが志村喬のことを、〝寡黙で照れ屋で、頑固だが、内に優しさ秘めた人〟と評している。

その志村喬の本名は、島崎捷爾。

家系は土佐藩士・島崎家の七代目、島崎毛登女・喜与の次男として、兵庫県生野（現在の姫路市生野町）で、明治三十八年（一九〇五）三月十二日に生まれた。

父の毛登女は高知第一中学校（現在の追手前高校）を卒業後、上京して農商務省鉱山局（農林省・通産省の前身）に就職し、のちに冶金技師の資格を取得して生野鉱山で勤務する。（志村喬の宿痾となる肺気腫は、幼年期をすごした生野鉱山の煤煙に基因していたかもしれない。）

さて、わたしが志村喬の映画をはじめて見たのは、戦前の『赤西蠣太』である。〝小説の神様〟といわれた志賀直哉の短篇小説を映画化したもので、監督は伊丹万作。わたしはおふたりの盛名にひかれて見ることにした。

志村喬の役柄は、疑うことを知らない朴訥な下級サムライであったが、無技巧の技巧ともいえるみごとな演技に、映画の醍醐味をたっぷり堪能させてもらった。

のちに志村喬は、『赤西蠣太』で映画開眼をはたしたと述懐しているから、よほど自信のもてる愛着の作品であったろう。

「生きる」に出演する志村喬

ところで世評に高い映画『生きる』（監督黒沢明）を見たのは、わたしが若松町で仮寓してまもない昭和二十七年（一九五二）であった。それより三十余年のちの昭和六十年（一九八五）かに、テレビで『生きる』を再見した。

いずれのときも、見終わったあとの感動は、いまでも胸に沁みこんでいる。

市役所に三十年勤続した市民課長、渡辺勘治の生と死がテーマである。――余命いくばくもない胃ガンであることを知った勘治は、これまで生き甲斐のある仕事をしてこなかった自分を顧みて、愕然たるおもいに打ちのめされる。

生きるために何をなすべきか、と苦悩する。そして、一念発起したかれは、児童公園の建設に全霊をあげてとり組むことになる。やがて児童公園は完成する。

この間、妻に先立たれていた勘治は、五歳のときから大事に育ててきた息子夫婦に、非情な仕打ちを受ける。これまでまったく遊びとは縁のなかった勘治が、である。

かれは雪の降る夜更けの児童公園で、ブランコを漕ぎながら、『ゴンドラの唄』（香北町・渓鬼荘に寓居した歌人吉井勇詞）を低音で歌う。まことに哀切きわまりない……。

いのち短し恋せよ乙女
朱き唇あせぬ間に
熱き血潮の冷えぬ間に
明日の月日のないものを

渡辺勘治はその翌朝、死す。

役どころのつぼをきっちり押さえて、末期ガンの勘治に成り代った志村喬。

〈映画人として生きるということは、いったい何なのか〉との、自身に課した命題にこたえて、迫真の演技をみせてくれた。

事実、志村喬はクランクインのときから、自分の躰を傷めつけて、頬骨が見えるほど痩せてしまい、とうとう移動性盲腸炎に罹り、手術のあと体重がすごく減った。

そのやつれたさまを維持しながら、撮影にのぞんだそうで、撮影が終わると胃潰瘍になっていたというから、まったく尋常ならざるふるまいである。

こうして、芸歴五十余年の志村喬にしても、宿痾に打ち勝つことはできなかった。

七十七の喜寿をまもなく迎えようとする、昭和五十七年（一九八二）二月十一日午後十時すぎ、

「誰にも知られず、ひっそり死にたい」

の一語をのこして、この世を去った。死因は慢性肺気腫による肺性心であった。

若松町で仮寓しだして四十五年余の歳月があッというまに消えた。色即是空。いまさら何をかいわんや、である。

いまは東城山町に住んでいるから、近距離のせいもあって松尾神社に再さい出かける。

社堂のまえで佇んでいると、なぜか自分が登じいさんの化身であるかのような気分になる。ふしぎなものだ。と思っていると、すぐそばに志村喬が、忽然とあらわれる。

「ひとすじの生をつらぬきなさい」

あたたかい励ましのことばをかけてくれたかとおもったら、サーッと幻像はかき消えてしまう。

そうだ。これからは、まぼろしの二人と付き合いながら、確乎とした足どりで生きてゆこう。悠ゆうと、急がずに――。

一九九八・六・一〇記

（ほりうちゆたか・雑文家）

満州（現中国東北部）苦難の一年（上）

島田美喜子

平和な社会願って

八月の声を聞くと、悲しみがドッと噴き出すような思いにかられる。

今年もまた、五十三年目の夏が巡ってきた。忘れることの出来ない、あの満州（現中国東北部）での苦難の日々を改めて思い出し、胸はいたむ。

軍国主義教育を徹底して教え込まれた時代に育った私は、戦争は正義の闘いであり、聖戦であり、神の国である日本は不滅で、絶対に負けることはないと信じていた。

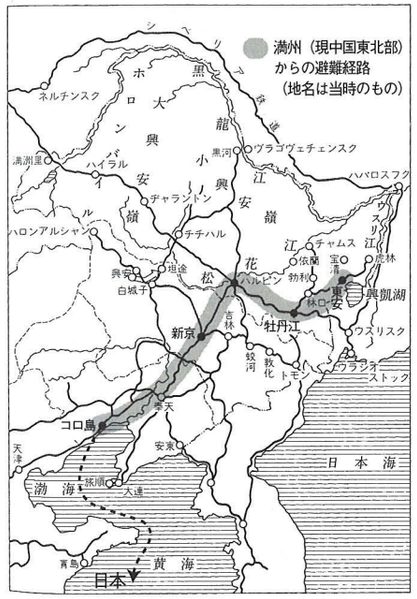
新聞やラジオのニュースは勇ましく、勝ち戦ばかりで、街は提灯行列、旗行列で賑わった。そしてお国のためと戦争を賛美することによって多くの戦争犠牲者はいうに及ばず、あたら若く尊い命を自ら進んで散らしていったのである。

当時私たちの唄った「軍国の母」の歌詞は

「生きて帰ると思うなよ。戦死の報が届いたら、でかした我が子あっぱれと、母はお前をほめてやる」

今思えばショッキングな歌である。どこの世界に子どもが死んでよろこぶ親があろうか。こんな歌を当たり前のように受け入れていた時代であった。

親の勧める見合い結婚をして、満州電信電話株式会社に勤務する夫とロシア国境に近い満州東安（現密山）へ渡ったのは一九四五年（昭和二十年）二月で、私は二十歳だった。



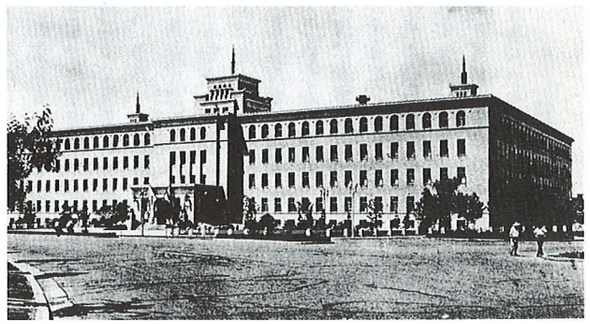
今考えれば、もうこの時は敗戦色は濃く、危険な状態であったのだ。

何と無謀で、何と無知で馬鹿な行動だったかと、悔しさでいっぱいである。しかし時の政府は、この期に及んでも渡満を推進し、開拓団を次から次へと送っており、しかも送られて来たのは一番危険な北満であった。

作家宮尾登美子さんが開拓団の学校の先生と結婚して渡満したのもこの年の四月だったと自伝小説にある。

戦争――。こんな悲しい、惨めな、愚かな、恐ろしい言葉があろうか。戦争こそ人権侵害の最たるものである。このような戦争を、二度と起こしてはならない。あのいまわしい戦争の体験を、戦争を知らない世代に伝えることが、私に課せられた義務と思う。

今の、豊かで平和な暮らしの中で、理解されることは難しいと思うが、私のこれからの記述が、子や孫に語り継がれて、人の命の尊さ、人権の大切さに気付き、そして二度と戦争をしてはならないとの思いに役立つことを願うものである。


満州電信電話株式会社新京本社。現在もそのままあるという

苦難のはじまり

忘れもしないその年の八月九日、突然ソ連軍が越境してきた。この日から、思いもかけない地獄の日々となってしまった。

昼すぎに夫が帰ってきて、「大急ぎで荷物をまとめて社宅の前に集まるように、自分は局と一緒に行動するので」と言ってまた出て行った。私はただオロオロしながら、お金、食料、衣類などをリュックや袋に詰めて家を出た。

まだその時は何も分からないまま、女、子どもばかりで東安駅の方面に向かった。時間が経つにつれて、続々と日本人が駅に集まってきた。大きな荷物を持ったその悲惨な顔を見ていると、これはただ事ではない、大変なことになったのだ、と初めて気が付いた。

遠くに見える列車は、客車と貨物車などずらり二十両か三十両連なっていた。

大勢の人のひしめきあう中で、線路から貨車に乗るのは大変苦労がいった。この列車に乗って逃げなくてはとみんなが我先にと争って、もうこの時は、義理も人情もなかった。結局弱い立場の人は乗れずに残されてしまった。あたりは泣き叫ぶ声、子を呼ぶ声、何とか乗せてと取りすがる者、またあきらめて柳行李に子どもを座らせて覚悟の自殺をする者等々、騒然とした中で後ろの方向を見ると、東安市には火の手が上がるなど、周囲は極限状態だった。

やっと乗れた汽車は石炭車で、それこそ立錐の余地もなく、立ったまま身動きも出来なかった。「荷物は捨てろ!!　人が乗れない」と叫んで、持っていた食料や衣類は全部投げ出されてしまった。

混乱極まる列車内

やっと動き出した列車は、途中でソ連機の機銃掃射を受けて、石炭車にもパンパンと当たり、本当に恐い思いだった。

こんな緊迫した中で、Kさんが急に産気づきお産が始まった。「誰か衣類を、布切れを」と叫んでいたが、誰もどうすることもできない状態であった。

これからどうなるのか、次々と変わっていく思いもよらない情勢に、ただうろたえ、まどうばかりであった。

ソ連兵が入ってきたらどうしようと、緊張感が高まり、みんなが騒いでいる中へ、「青酸カリ」の包みが回ってきた。私は気味が悪くて震えてきた。不安はますます募るばかりだった。

そんな中で、「青酸カリ」を飲んで自殺した家族があった。その死体を外に出そうとした時、二歳ぐらいの男の子がスクッと起き上がったのには驚いた。死の際から甦ったものの一人残された可哀相なその子は、その後どうなったか分からない。ただ混乱のるつぼの中であったから。

その後、列車に乗れなかった人や、鉄道沿線でない集落に住んでいた大勢の日本人は、果てしない満州の広野に取り残された結果、昼夜を分かたずに歩き続け、途中でソ連兵や現地人に襲われたり、筆舌に尽くせない想像を絶する苦難の道程であったという。殺されたり、餓死したり、自ら命を断ったりして虚しく恨みを呑んで北満の露と消えていったのである。その数は実に十六万人にもなるという。

ちなみに、高知県西土佐村の開拓団は村を挙げて移住したが、帰国を目指した三百五十七人中、家にたどり着くことができた方は八十二人であったと、戦後新聞を見て知った。誠に哀れというも愚かなりの言葉に尽きるばかりである。

（しまだみきこ・主婦）

動物たちの子育て ⑥

中西安男

《マントヒヒ》

さて、動物たちの子育ても最終回となった。最終回に登場するのは、我々人間に最も近いサルの仲間である。我々と同じく霊長類に分類されている訳だから、その子育ては実に人間臭いものがある。

ただ、サルと一口に言っても世界に二百四十種ものサルがおり、しかも原猿類から類人猿まで形態や生態にかなりの幅がある。そこで、我々日本人が最も親しみのあるニホンザルと同じ、オナガザル科に分類されているマントヒヒの子育てを中心に紹介したい。

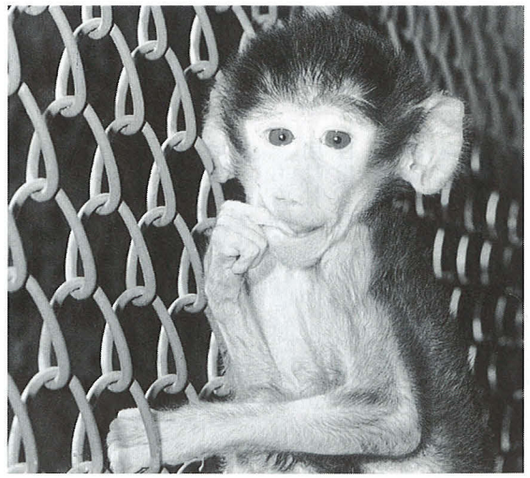
マントヒヒは旧施設時代から飼育をしているので、これまで二十回近い出産、子育てを見てきた。マントヒヒの妊娠期間は約百八十日ほどで、一頭の赤ちゃんを出産する。生まれたばかりの赤ちゃんは、顔などの皮膚が赤みを帯びており、まさに赤ちゃんという感じである。

生まれたばかりはとても弱々しいのだが、サルの赤ちゃんは素晴らしい能力をもって生まれる。母親の胸に抱かれると、しっかりと手足で母親の毛をつかみ、母親の走る、跳ぶといった激しい運動でも絶対に落ちない握力をもっているのである。

母親の体色は茶色であるが、赤ちゃんの体色は真っ黒で母親とはまったく違う体色をしている。赤ちゃんの体色が母親と違う理由は、母性本能をくすぐるためにあり、また、群れの成獣雄や他のメンバーに対し「私は赤ちゃんよ」というサインにもなっている。このベビー服を着ている間は、リーダーの餌を横から取っても怒られないし、何をやっても大目にみてもらえるのである。

一度、二頭の雌がほぼ同時に出産したことがある。片方の母親は数回の子育ての経験があるベテランで、もう一方の母親は初産だった。このベテランママと新米ママの子育ては明らかに子どもの扱いが違っていた。新米ママは生後一週間を経過しても子どもを片時も胸から離さず、とにかく大事に大事に育てていた。

一方のベテランママは出産したその日の内に、嫌がる赤ちゃんを胸からひっぺがし、床に置いていた。赤ちゃんは当然不満を訴え母親の元に帰ろうと、体を支えることもできない手足を踏ん張り、はいずるように母親に近づく。しかし、母親はもう少しで手が届くというところで後ずさりする。まるで「ほら、ここまでおいで、ガンバッテおいで」と鍛えているようだった。



マントヒヒの赤ちゃん

新米ママの子どもも、生後二週間もすると自分で母親から離れたがり、遊びたがるようになった。それでも、もがく子どもを抱き直し、なかなか離そうとはしなかったのだが、ついに母親の胸から離れて自分の手足で床に立つことが許されるようになった。しかし、それでも自由に遊びに行くことはできなかった。何と新米ママは絶えず子どもの長い尾をしっかりと握り、遠くへ遊びに行けないようにしていたのである。

こうした母親の子育ての違いはあるものの、子どもたちはすくすくと成長していく。マントヒヒの成長段階は、赤ちゃん期、子ども期、青年期という具合に分けられよう。

赤ちゃん期は、あの黒いベビー服で群れのメンバー全員からある程度の保護が受けられる。そのベビー服は生後六カ月ほどで茶色に変化するのだが、ベビー服を脱ぎ捨てた時から、群れ生活の厳しいルールを全メンバーから教わるようになる。これが子ども期の始まりである。青年期は種に定められたレールを、雄は雄としてのレール、雌はまた別のレールにそって歩き始める。

さてさて、サルの母親が産気づき無事に赤ちゃんを出産し、その赤ちゃんを我が胸に抱くという行動は本能であると思われている人が多いはずだ。種として子孫を残す基本的行動ではあるのだが、実際には子育てという行動には学習が必要なのである。群れの中で普通に育つと、赤ちゃん期、子ども期、青年期という成長段階の中で、種として必要なさまざまな学習をしていく。

母親の近くで遊ぶ子どもたち

赤ちゃん期は母親の温もりを体験し、子ども期は年下の子どもと遊び子守をする。そうした経験や学習があって初めて、雌は自分が母親になった時に自然に子どもを扱うことが可能なのである。もし、何らかの要因でそうした学習ができていなかった場合、出産しても子どもを抱くという行為さえもできないということがよくある。

子育てよりも、その前段階である交尾という行動ですら高等霊長類では学習が必要なのである。アニマルランドには三十三歳になるオスのチンパンジーが飼育されているが、彼はその学習の機会を失ったために、交尾ができないのである。

彼は種に必要な学習をするべき幼年期に、アフリカのジャングルから人間に連れ出され、一般のペットとして飼育されたのち、某動物園に引き取られた。その動物園でも動物ショーに出演させられ、チンパンジーとではなく、人とのコミュニケーションだけを学ばされた経歴をもつ。

大事なチンパンジーとしての学習ができなかったばっかりに、発情したメスと同居しても、何をどうしたら良いのか分からない。交尾という基本的な雄の役割さえもできない。チンパンジーでありながらチンパンジーでない動物となったのである。

学習は交尾や子育てだけではない。食物の見つけ方、捕らえ方、何が食べられ何が食べられない、どこへ行けば水が飲め、外敵から身を守る方法、仲間との基本的コミュニケーションの方法など、種として生き抜き子孫を残す行動の多くに学習が必要な動物が意外と多い。生きるために学習が必要な動物は、人間だけではないのだ……。

（なかにしやすお・わんぱーく こうち・アニマルランド）

※表示価格はすべて本体価格です。

坂本正夫著
土佐の習俗 婚姻と子育て
四六判・二〇〇頁 一、四〇〇円

山岡 浩著
高知の農業
A5判・二四八頁 一、八〇〇円

外崎光広著
植木枝盛の生涯
四六判・二六〇頁 一、九〇〇円

高知市文化振興事業団編
高知のエスプリ
A5判・一六〇頁 一、一六五円

山本 大著
幕末の青春 ―坂本龍馬の生涯―
四六判・一六八頁 一、一六五円

依光 裕編著
珍聞土佐物語 上・下巻
四六判・三九二 四〇八頁 各一、五五三円

外崎光広著
土佐自由民権運動史
A5判・四一四頁 二、七一九円

外崎光広編
土佐自由民権資料集
A5判・三四四頁 三、〇〇〇円

岡林清水著
高知県文学散歩
四六判・二七八頁 一、七四八円

高知の文化を考える会編
高知の文化を考える
A5判・一八八頁 一、一六五円

高知市文化振興事業団編
わがまち百景
A5変・二二四頁 一、一六五円

筒井広道著
画帳の歳月
A5変・二五六頁 一、九四二円

土居重俊・浜田数義編
高知県方言辞典
A5判・七三六頁 六、〇〇〇円

高木啓夫著
土佐の芸能
B5変・三四六頁 四、八〇〇円

話しことばの重視

中内栄子

平成四年から実施された教育課程は、社会の変化に主体的に対応し、心豊かでたくましく生きる人間の育成を目指し、㈠、子供一人ひとりが自分なりの感じ方や考えをもつ。㈡、個性的な資質や能力を育て、自己実現に生きて働く基礎的・基本的な能力を養う。㈢、自ら学ぶ意欲を高める。㈣、わが国の文化を尊重し、国際理解の意識を大切にする等の内容を特に重視すべきことを期待した。

そこで、ことばそのものについて学ぶ国語科では、「国語を正確に理解し適切に表現する能力を育てるとともに、思考力や想像力及び言語感覚を養い、国語に対する関心を深め国語を尊重する態度を育てる」ことを目指している。

単なる知識・技能の習熟に偏りがちだったこれまでの指導に対して、自ら学び考えることのできる行動的な能力を最も大切にしているのである。

国語科で育成すべきことばの能力は多岐にわたるが、話すこと聞くことの力の育成が取り上げられたことは特に大きな意味があった。日常生活において話しことばの占める割合は極めて大きく、しかもこれからの情報化・国際化の社会では、伝達や思考の手段として更にその重要性は明らかである。

人間の人間たる所以は言葉をもつことであり、言葉で思考するところにある。しかも言葉は話しことばを源にしていることを考えれば、音声言語が人間そのものと直接かかわってきていると言える。

今、音声言語が重視されるのは、現代の情報化社会において音声言語が様々な形で独自性を発揮しているからである。テレビやビデオ等のメディアでは、文字言語にとって代わり、音声言語から文字言語へ変換できるコンピュータが実用化されるのも時間の問題だとも言われる。

また、今や世界は一つになりつつある。どこの国の人々とも心を通じ合い、支え合って生きていかなければならない時代である。その場合の大切な伝達手段が言語であり、話すこと、聞くことの行為である。

人間は自分自身を表現することを本性としている。母国語としての日本語を適切に表現できる力を育てる教育が、国際社会に即応する人間を育てることになると言えよう。

話しことばは、書きことばと比較にならないほど「人」を意識する。話すこと自体が自分自身と話し相手との連帯を意識しており、相手によって話す内容や話し方を考えることも普通である。聞くことも、話し手と聞き手自身との関係がなければその行為は成立しない。

このように、言葉が人間そのものと直接かかわっているとすれば、話すこと、聞くことを大切にすることは、人間そのものを大切にすることなのである。そして、それを通して自らの人間性を高めていくことができるであろう。教育の場で、話すこと、聞くことを重視する根本的な意味がそこにある。

「あなたは、自分の声を自分の耳で聞いていますか」。若い頃、先輩に問われたこの一言は、すでに何十年も経過しているのに鮮烈に残っている。「親や教師は最大の言語環境である」と言われながら、話しことばへの関心は低調であった。

今回、改訂される新教育課程でも生きる力の育成が重要な課題となり、コミュニケーション能力や国際・情報化への対応としての音声言語の指導が更にクローズアップされる。

まず、親や教師は美しい日本語への先駆者でありたい。それは未来を担う子供たちへのつとめであると思うのである。

（なかうちえいこ・元高知市立初月小学校長・元高知県女性校長会長）

民俗雑記帖3　水と魂

梅野光興

九月に盆の話とはいささか時期はずれのようだが、今年は閏年のため、旧暦の七月十三日は九月三日にあたる。県内の各地で、まだ旧暦で盆を行う所があるはずである。

歴民館では、平成七年の夏に『死と再生の文化』と題した企画展を行った。私たちはその準備のために、県内の盆行事をいくつか訪ねてまわったのだが、驚いたのは、まだ昔ながらの行事が今なおあちこちで盛んに行われていることだった。

水辺で火を焚き、祖霊をまつる「水もり」行事
（北川村久府付　94.8.14）

盆棚の研究を行っている島根県の喜多村理子さんも、「高知や徳島にはまだ多様な行事が残っているのですね」とおっしゃられたから、これは私ひとりの感想ではない。

しかも、高知県の盆行事には、日本の祖先観、死霊観を知るために参考になる伝承が多い。

民俗学の本には、盆の祖霊は、墓や門から迎え、水辺に送るというのが一般的であると書かれている。墓で火を焚いて「おじいさん、おばあさん、この明かりでおいでなさい」などと唱え、背負うまねなどして迎え、送るときは精霊舟などを作って川や海に流すのである。だが、墓から迎えてきたものを、川へ送るのは矛盾である。この件についてはまだ説得力のある説明を聞いたことがない。

ところが、高知県では、墓へ仏迎えに行くという事例もあるが、川辺や海辺で火を焚いて仏を迎え、送るという事例が目につく。

十和村戸川では火をとぼすといって、八月十四日の朝、美しい五色の紙の旗を川岸に立て、その下で火を焚く。これを迎え火といい、十五日にも同じことをし、十六日朝には一切を川に流す。

中土佐町久礼の港町では、旧暦七月十四日には、広い海岸一面にシキビの列ができる。あたりの石を真ん中にすえ両側にシキビを立て、その前で火を焚いて、海から来る仏さんを迎える。翌日には同様にして送る。

これらの事例はいずれも、水辺に迎えて同じ水辺から送るもので、墓で迎えたものを海川へ流すような矛盾は生じない。もちろん、このような所でも墓へも行く事例はあるが、中には北川村のように、盆には仏さんは川に出ているので墓参りはしないとまでいう所さえある。もしかしたら、墓で祖先を迎える習俗は意外と新しいものかもしれない。

山村などで見る限り、古い墓は、名前も何もないただの自然石を置いてあるだけのものである。それが戒名が入った墓石になり、大きく立派になっていくに従って、墓の重要性は大きくなっていった。それにつれ、仏もそこにいるのだという観念が強くなっていったのではないだろうか。では、それ以前には死者の魂はどうなると考えられていたのだろう。

徳島県の一部では、葬式から一週間ぐらいしたら、カリヤといって、蓑笠をつけた「かかし」のようなものを水辺に切り倒したり、崖から突き落とすという儀礼を行っていた（近藤直也『祓いの構造』創元社）。

この「かかし」はおそらく霊魂の象徴である。死によって肉体と魂が分離したあと、肉体は土に埋めるが、恐ろしい霊魂の方はカリヤに宿して、水辺などから遠くへ放逐していたのである。

死者の霊魂を水辺などから追い払っていたとすると、その死者の魂を水辺で迎えたり、川でまつるのはむしろ自然である。高知県の盆行事は、そのような古い死霊観を残しているのかもしれない。

高知県の民俗は、さながら「生きている博物館」のようである。だが、それも過疎や世代交代のなかで消滅の危機に瀕している。私たちはそれを少しでも多く記録しておきたい、と思うのである。

（うめのみつおき・高知県立歴史民俗資料館主任学芸員）

第14回写真コンテスト・高知を撮る入賞作品

高知を撮る

材木筏（昭和38年 若松町）　清岡義道

放送大学

風俗歳時記

「えっ、そんなのあったっけ……」

「アナウンサーの養成所かな？」

「ああ、あれね。ＮＨＫがやっている……」

「放送大学とは？」という問いに対して、第三の答えが一番多かったが、「ＮＨＫがやっている」のは、〈ＮＨＫ学園〉の生涯学習通信講座。

〈放送大学〉は、文部省・郵政省所管の、〈放送大学学園〉によって設置された、正規の大学である。

テレビとラジオで授業を行う、〈教養学部〉の単科大学で、〈教養学士〉の資格が取れるし、一科目だけでも学ぶことができる。

しかも、18歳以上であれば誰でも入学できるうえに、本人の都合によって、4月（第一学期）、または、10月（第二学期）に入学できる。

起源は、英国で71年に開校された〈オープン・ユニバーシティー（公開大学）〉。

日本には、83年に導入され、本部は千葉市にあるが、北海道から沖縄に至る各地に、学習センターがある。

高知市内、大津の土佐女子短大内にある〈高知学習センター〉には、本年第一学期現在、18歳から、なんと！、90歳におよぶ、学歴も職業もさまざまの、９０２名の〈学生〉が登録しているという。

家庭で授業を視聴できなかった場合には、センターに備えられたビデオテープなどで、再視聴できる。

また、各学期末に行われる、〈面接講義〉（スクーリング）も、同センターで、土・日に開講される。

幅広い分野にわたる約３００科目が用意されていて、司書、学芸員、教員、税理士、不動産鑑定士など、各種資格取得の一助として受講する学生もいれば、実利をはなれて、趣味として愉しむ方々もいる、と聞く。

問い合わせや、資料（無料）の請求は、高知学習センター（電話　０８８８―６６―５１２３）へ。　（朴）

浦戸大橋の真下、浦戸の稲荷神社内に「津波の碑」がある。安政元年の大地震による津波は浦戸や城下に大被害をもたらしたが、この時の津波の恐ろしさを後世に伝えるために、津波の被害を受けて壊れた鳥居の一部を記念碑にして建てられたものである。「防災の日」を前に、群発地震や集中豪雨が発生している。幸い県内では大きな被害は受けていないが、「災害は忘れられたる頃来る」という郷土の先人・寺田寅彦の格言がある。油断大敵である。

風伯

宴の終わり

「マルディ・グラ」という煙草がある。アメリカの高級煙草で有名なＮ・シャーマン社の銘柄で、カーニバル最終日を意味するその名称から花火を連想させる鮮やかなパッケージと、同じデザインのフィルターが人目を引くお洒落な煙草だ。

ここ十数年、土佐のカーニバルよさこい祭りを見るのは最終日の夕方から最後まで帯屋町でと決めていた。踊り子達の汗が飛び散る同じ平面こそがこの祭りには相応しい。所属チームが踊り終えてからも、まだ踊り足りない若者達が後続の他チームに合流するのが見られるのもこの場所・時刻ならではだ。

総てが終わってから、なお自然発生的な小グループが街角で踊り続けることもあった。それらには、祭りの果て、宴の終わりを色濃く漂わせる哀歓があった。土佐の一つの夏がここで終わるのだ。

だが近年上位チームが集まって競演する最終日程が新たに設けられて様子が変わってきた。この幕切れは華やかなショーではあっても、混沌と熱狂をはらんだ〝祭り〟ではもはやなくなりつつある。時間外の自然発生の踊りが制止されることもあった。

有名チームの参加料高騰などが聞かれる中で全体に管理されたイベントと化すとき、土佐のマルディ・グラはどう変わるのだろうか。

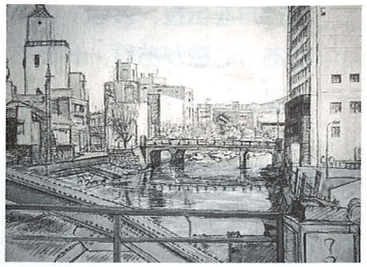
「マルディ・グラ」は高価な煙草だが吸い終わってなお余韻が残るほどの味ではない。そこが又いかにもアメリカ煙草なのだが。　（南北）

第18回市民フロア企画展

キャンバスに遺す「四つ橋」展

―幡多倉橋・菜園場橋・木屋橋・納屋堀橋―

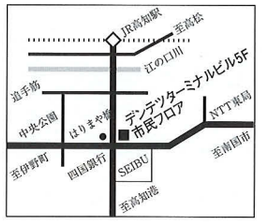
九反田の再開発に伴い大きくその姿を変えるであろう「四つ橋」周辺の風景を記録として遺しておきたいという洋画・日本画家16名による合同作品展です。油絵・日本画・水彩画など約30点を展示。さまざまな角度からとらえた「四つ橋」の表情をこの機会にお楽しみください。



1998／9／4(金)～9／15(火)

10：00A.M.～6：00P.M.会期中無休

はりまや橋・デンテツターミナルビル５階



今号の表紙

「Morph」　浪越篤彦

Morph（モルフェー）とはドイツ語で「生成する―かたち―」といった意。それは例えるならば、青空に浮かぶ白き雲の移ろいゆく姿にも似ていようか。

一雲のような囚われの無い自由なかたち―を求めて、一度閉じた眼をゆっくりと開き、その瞳に映る世界を確かめた後、もう一度静かに眼を閉じてみる。

（なおあつひこ・高知県立高知江の口養護学校教諭）

平成10年度第48回高知県芸術祭特別共催行事

これぞ本物！ 三味線ロック!!

国本武春・うなりまSHOW'98

新進気鋭の浪曲師・国本武春のコンサート。カントリーミュージックからバラードまで、三味線かかげて歌います。また、ご存知「忠臣蔵」では、そのハイライトをロックンロールとバラードで歌って聞かせます。またミニ浪曲教室では、掛け声の掛け方を伝授、会場一体となって盛り上がる「爆笑ライブ」が展開されます。語りがあって歌があり、ドラマがあって笑って泣かせての、とにかく楽しい、元気が出るコンサート！

■プロフィール■

浪曲師の両親のもとに生まれ、19歳で浪曲に目覚め「語り」で発表することの魅力に取りつかれる。87年頃から、三味線にギターのフレーズを取り入れた独自の奏法「三味線ロック」を開発、幅広い観客層から支持を受けている。95年文化庁芸術祭賞演芸部門新人賞、並びに第12回浅草芸能大賞新人賞を受賞。「ポンキッキーズ」の音楽制作や来年の大河ドラマに出演決定など、マルチに活躍中。

日　時：**1998年9月22日(火) 午後7時開演**（開場6時30分）

場　所：**高知県立県民文化ホール・グリーン**

入場料：前売 **一般2,000円，大学生以下1,500円**（当日各500円増）全席自由

主　催：(財)高知市文化振興事業団

助　成：(財)高知県文化財団／後援：高知市教育委員会、高知市文化推進協議会、高知新聞社、NHK高知放送局、RKC高知放送、テレビ高知、KSSさんさんテレビ、エフエム高知

お問い合わせ先・チケット電話予約：
高知市文化振興事業団　〒780-0870 高知市本町5-2-3　Tel.&Fax. 0888-73-4365

チケット取り扱い：高新プレイガイド(25-4335)／県民文化ホール(24-5321)／チケットセゾン(83-0111)／チケットぴあ(25-2191)／県立美術館ミュージアムショップ(66-8118)／高知市文化振興事業団(73-4365)

財団法人 高知市文化振興事業団 〒780-0870 高知市本町5丁目2番3号 TEL(0888)73-4365 郵便振替01680-5-14869